

第2 Jukka Lehtonen 氏インタビュー抄録

- 1 訪問日時：2018年9月3日
- 2 訪問先担当者：Jukka Lehtonen 氏（ヘルシンキ大学専任講師）
- 3 聴取事項 性教育について

(1) フィンランドの性教育

Q：2018年6月に東京新聞があなたを取材して記事にしたものを読んできた。その記事によれば60年代から大きな変化があったということだが。

A：60年代から70年代にかけて、社会民主主義の北欧諸国すべてで似たような変化があった。いずれの国の政府も非常に民主的で、従前は異なった複数の教育制度が併存していたところ一つの基礎教育制度がとられるようになった。同時に、あらゆる種類の変化が起こりつつあった。人々が教会や教会の教義から距離をおくようになった。若者文化やフリーセックスの概念など、これらのすべてが人々の考え方を変えた。60年代後半から70年代にジェンダーの平等や育児休暇の問題も取りあげられ、中絶も合法化された。

その頃、学校で生徒がセクシュアリティについての知識を得ることの意義も強調された。そういった意味で、これは北欧諸国で起こっていた大きな変化の一部だったといえる。フィンランドは、スウェーデンやデンマークのようなより先進的な国よりは少し遅れていた。

Q：親が学校で性教育が行われることに抵抗を示すということはなかったのか。

A：親自身に性教育に関する知識がなく、どのように教育をしてよいかわからなかったので、学校で誰かが教えてくれるならありがたいと考えた。日本の親に対しても、誰かが学校でセクシャルハラスメントや性暴力や性病や良い性生活を送る方法について教えてくれたほうが子どものためだというのは、(性教育を普及させるための) 良い主張なのではないか。

米国ではセックスについて教えれば早い時期からセックスをすると考えられていたが、セックスについて教えたほうがセックスをしないことが研究で示されている。セックスをしているのは少数の人だと知れば、自分だけがセックスをしたことがないわけではないとわかる。そうすれば、セックスをしたことがないということが楽になり、待てばよい、焦る必要はないといえるようになる。フィンランドでは、かつてはより早い時期にセックスをするようになっていっていたが、現在では(セックスを始める年齢は)より高くなっている。

Q：なぜ情報を得れば早い時期にセックスをしなくなるのか。

A：ピア・プレッシャーがすごく強い。他の人もセックスをしたことがないことがわかっているならば、「したい相手を見つけられないときに、どうして焦る必要があるのか」と考えられるようになる。フィンランドでは、性教育が始まる前はもっと10代の妊娠や望まない妊娠が起こっていた。

Q：フィンランドでは、性教育のメソッドは誰が作ったのか。

A：性教育は教科書に基づいて行われていることが多い。3つか4つの出版社が様々な要素を取り扱った良い教科書をあらゆる年代向けに出している。ただし、主には7年生か8年生が対象である。これらの教科書は、保健の教員、いくつかの団体、性教育

に関する専門家により共同執筆された。教員はこれらの教科書を基に同じことを繰り返し教えている。個人的にトレーニングを積んでいる教員もいるかもしれないが、どの教員も基礎的な教育の中で性教育をどう教えるかということをお教えされていない。

性教育は1970年代に保健の授業に入っていたが、1990年代前半に財政の問題で必修から外され選択科目とされたところお教えられなくなってしまった。これはまずいということで、2001年に別の独立した科目として必修になった。

Q：一般の人々が教会から距離を置くようになったことが関係するか。教会が変わったのか、それとも一般の人々が変わったのか。

A：人々の教会離れということがまずあった。教会も大きく変わってきて、最近では性教育を肯定している。

Q：教会は同性間の婚姻を認めているのか。

A：教会は公式には同性婚の結婚式の開催を認めていないが、多数の牧師は同性婚について好意的である。結婚式を執り行う牧師すらいる。

(2) 日本の学校における性教育

Q：日本では、足立区の学校で行われた性教育について、国会議員がそのような性教育をすべきではないと介入し記事になった。このような状況がある中、日本で性教育を広めるためには、どうしたら良いだろうか。

A：足立区の話は聞いたことがある。政府を変えるしかないだろう(笑)。議論のレベルでは、性教育をするよりも性教育をしないことによる問題(病気、望まない妊娠・中絶など)が大きいというふうに、性教育のメリットを強調した方がよい。子どもに安全で健康でいてほしいなら、教育すべきだということをもっと強調する。

Q：どうしたらそれができるのか。性教育と性行為の経験時期の相関についての統計をとる必要性すら日本では理解されておらず、それが問題だ。

A：先ほど、性教育を受け知識を得れば得るほどセックスをしなくなるという統計の話をしたが、性教育をすれば、セックスをする場合により良いセックスをするようになるということもいえる。

今どきの親からすれば、セックスをしてもよいが、だったら危険のある外ではなく家でしてほしいという気持ちがある。それから、セクハラ、暴力的な行為、望まないセックスにNoということをお教えられる。特に女の子に多いが、彼を失いたくないから、嫌なのに無理やりセックスをするということを防ぐことができる。だから、学校で性教育をするということに意義がある。

Q：日本では学習指導要領において、性交は取り扱わないことになっているので、セクシャルコンセンツの話とか、知識があればセックスをしなくなるといった話はそもそも問題にならない。そのような状況をどうやって変えたらよいか。

A：学校のカリキュラムで性交について直接話せなくても、(恋愛)関係について教育することはできるのではないか。良い関係とはどのようなものか、相互に尊敬しなければならないこと、何をしたいか又はどのような関係を持ちたいかを定める権利を各人

が持っていること、暴力に対抗すること、関係に絡むハラスメント、同意が基本だということ、望まないセックスはしないこと等の要素は話し合うことはできるのではないかな。

Q：大事なのは、現場の実践を誰がつくりあげること。性交について教えるはいけないという学習指導要領のために、日本の現場の教員は萎縮しており、良い実践を他の学校と共有できない。意識をもっている先生がいたとしても、それを教育の現場で共有できない。

A：おそらく自治体や他の団体が高い次元で現在の制度に抵抗すべきで、個人の教師がキャリアをリスクにさらして責任を負うべきではない。たとえば、市のレベルで、完全に法に従うことにはならないとしても、性教育をすることは重要だと判断する等が考えられる。労組、政党等がリードすることも考えられる。

(3) 性に対する意識—日本とフィンランドの比較

Q：日本では、本音では結婚するまでセックスを経験しない方がいいと考えるむきがある。フィンランドでもかつてはそういう価値観があったのではないかな。

A：60年代に劇的な変化があった。60年の終わりに避妊が容易にできるようになったことによりセックスをすることが容易になった。というのは、かつてはシングルマザーになるということはよいことと思われていなかった。今では法的に結婚していない同居カップルのほうが多くなったので、スティグマがなくなった。シングルペアレントになることを選択してもよいし、カップルが結婚しないで同居して最初の子どもが生まれてから結婚しようかということになってもよい。秩序が変わった。また、60年代から70年代をとおして、フィンランドだけでなく北米でも同じことが起こっていたと思うが、教会と距離を置くようになったり、誰もが同じ学校に行くようになったり、あらゆる種類の平等化があった。伝統的な価値観や家族からも距離を置くようになった。60年代から新しい価値観からの若者文化が盛り上がり、親世代への反抗という社会全体の文化的な背景もあった。同時にその頃、フィンランドでは社会構造の変化があり、都市化が進んで多くの若者が都会に出てきて親元から離れて暮らすようになり、新しいルールに従うようになったので、その点も影響している。一つの事象を上げることはできないが、大きな社会的変化が起こっていた。

Q：フィンランドも日本と同じように晩婚化が進んで、仕事をするようになってから結婚することが一般化した。それならなぜセックス経験が早くなったのか。

A：いろいろな統計があるが、14～15歳のセックス経験率が25%と言われている。日本はもっと遅いのではないかな。(フィンランドの)人々の反応は、たった4分の1かという感じで、非常に早いとは感じていない。

(視察参加弁護士のコメント：日本の感覚からすると経験が早い子どもが多い印象だが、性教育が義務化されるようになる前の実情も日本とは異なると思うので、単純な比較は意味がないように思う。)

Q：そのセックス経験率について、両親は「早すぎる」と思っているのか。

A：性教育がなかったらもっと高い経験率（80%とか）になっていたと思う。親世代はそれほど高い数値でなくて良かったという受け止めだと思う。性教育の中ではコンドームを配って使い方を教えるのが典型的である。コンドームを配って教えるという教育が効果的だとフィンランドの親世代も思っている。

Q：日本ではセックスしていないことが前提で親は考えている。そこはどうしたらいいか。

A：それは事実と違う。子どもは3歳児でもセクシュアリティを理解している。セックスが秘密だったり、セックスについて質問できなかったり、セックスは話してはいけないもの、君の年には早すぎるものという扱いをすることで、セックスが悪いものであるという印象を与えてしまう。

(4) LGBT について

ユッカ・レヘトネンさんが日本人の夫と同性結婚をしていることから、話題が LGBT に移った。ユッカさんは、当初は同性パートナーシップで登録し、フィンランドで同性間の結婚が認められるようになってから結婚をしたとのこと。

ア LGBT の生徒に対するいじめ

Q：LGBT の生徒に対する深刻ないじめはあるか。アウティングの問題はあるか。

A：一般的に、ヘテロ・セクシャルでない生徒のほうが平均よりいじめられている。ジェンダーロールに挑戦するような生徒、たとえばフェミニンな男子や、女性らしく振舞わない女子がいじめられたり、悪口を言われたりすることはよくある。大きな問題である。

イ 欧州司法裁判所の裁判

Q：欧州司法裁判所（ECJ）は、様々な条件付きではあったが、もし同性カップルが EU 圏内で結婚した場合、そのカップルの一方が同性婚を認めない国の出身者だとしても、EU 内での在留を認めなければならないと判断したと思うが。

A：それは同性婚を認めない東ヨーロッパの国について意味のある判決だ。

（視察参加弁護士の解説：EU 圏内の在留している国で婚姻した同性のカップルについては、同性婚を認めていない国の出身者が、他国のパートナーを呼ぶ時は、同性婚を認めていないことを理由に領域内で居住する権利を拒絶することを許さないというルール）

ウ その他

Q：フィンランドの弁護士会は、どうやって同性間の結婚の問題に取り組んでいるのか知りたい。

A：文化的なことなので、どのような主張が有効かは地域によって異なり難しい。フィンランドでは、平等に基づく主張はかなり重視される。あるグループの人々が他の

人々と同じ権利を持たないことで、日々の生活でつらい目に合う。パートナーが死んだり、病気になったりしたとき、パートナーの子どもを共に育てているような場合、結婚又は関係の登録をできないことにより多くの問題に直面する。このような現実的な理由づけは理解されやすい。

Q: フィンランドでも日本でも、LGBTの問題は盛り上がっているように感じるが、それはなぜだと思うか。何かきっかけになるようなことがあったのか。

A: 一つの事柄だけではないと思う。私の生きてきた期間を通して、LGBTに好意的な様々な運動家や政治家がいた。元大統領タルヤ・ハロネンは、70年の後半から80年代の初めにSETAの議長でもあった。研究者やその他の人々もいた。他国の事例が人々の考え方に影響を与えてもいた。スウェーデンやデンマークやノルウェーに同性間の婚姻制度があるのになぜフィンランドにないのか、と疑問を持つようになった。変化は徐々に起こったのであり、時間がかかった。

Q: 日本では、国会議員の杉田水脈氏の同性カップルは非生産的という発言が話題になった。

A: 政治の場でLGBTがあまり取り上げられていないことを考えると、ある面では悪いことではないかもしれない。そういう馬鹿げた発言があると、新聞等が反応し、みんなが注目してより冷静な議論をする。これは、なかったことにされて、まったく議論されないよりいい。長い目で見たら、むしろ水田議員は称賛されるべき存在かもしれない。

(5) 家庭における性教育

Q: フィンランドでは、親が家庭で子どもとセックスの話をするのは一般的か。

A: 今は昔に比べて一般的になっていると思う。子どもはとにかく訊き続けるので、親は子どもが生物学的にどのように生まれるかという話をかなり正直にする。かつては子どもはどこかからやってくるというような説明をしていたが、今はちゃんと話すので、その際にセックスについて話すことになる。しかし、親は、性病や性暴力についてはほとんど話さないと思う。親は子どもにコンドームを渡すかもしれないが、(性病や性暴力については) 親自身が知らないのかもしれない。だから、親は学校教育がこうした問題を取り扱ってくれて喜んでる。

Q: 今回の視察に参加しているメンバーの一人に10歳の子どもがいる。その子は、子どもができる生物学的な仕組み(卵子と精子が会う)はもう知っているが、さらに卵子と精子がどうやって出会うのか教えてほしいと訊いてきた。ところが、自分たち(親)も性行為をしていると想像されるのに抵抗があって教えられないということだ。どうしたらいいか。

A: たぶん、10歳子どもなら、友達やインターネットを通して知っている。

他の親たちと、こういう風に話せばいいか、こんな言葉を使えばよいか等といった練習するといい。思ったより簡単なことだと感じると思う。親が恥ずかしがって話せないでいると、子どもがセックスについて知るころには、セックスを何か恥ずかしいものと認識するようになってしまう。だから、親が恥ずかしさを克服して、普通のこ

ととして振る舞うのが子どものためになる。

フィンランドでも、子どもが父親に質問すると、「お母さんに聞いて」と言われる(笑)。大抵、母親の方が、男の子、女の子問わず、多くの情報を与える。ただ、女の子に教える方が多い。父親は、女の子、男の子を問わず、あまり教えない。だから、男の子は、家庭の中で情報を得る機会が少ないので、学校の性教育がより大切になる。女の子の方が、インターネットで情報を集める等、もっと興味を持っている。男の子はインターネットのポルノを見て、誤った情報を得ている。学校で、ポルノは「演技(うそ)」等と教えてはいるが。

Q: 男の子のほうができるだけ早く童貞を捨てなければならないというプレッシャーにさらされているようにも思う。

A: その通りだ。だからこそ、男の子に性教育をすることはより重要である。

(6) ポルノグラフィー

Q: 日本はポルノグラフィーに寛容だが、どう思うか?

A: そう思う。他の国のほうが日本よりずっと厳しい制約がある。特に、絵(drawing)についてはこれが当てはまる。子どもたちの性教育をポルノグラフィーに任せたいか、それとも学校に任せたいかということも、議論のポイントになる。

Q: 今回参加した弁護士の一部の私見だが、少女アイドルグループには、児童ポルノの一種ではないかと思われるものがあると思う。ビキニを着たり、時には抱き合ったりキスしたりしてみせている。

A: 非常に興味深いと思う。なぜなら、子どもに性教育をするのは許されないのに、子どもや若い女性の性的なイメージが蔓延するのは許されている。これはフィンランドの文化にはない。子どもはイノセントなものだから学校でセックスについての情報を与えてはいけないとしながら、子どものポルノグラフィックな又はセクシャルなイメージを誰でも容易に入手できるというのは、かなり矛盾しているように思う。学校やメディアがアニメをはじめとするこのような文化を批判したり、分析したりすればよいのではないかと思う。ポルノグラフィーについてのクリティカル・リーディング、例えば、ポルノがどのように作られたか、どのようなポルノか、ポルノの何が問題か、ポルノが心にどのような影響を与えるか、そしてポルノは事実ではないというようなことを。

Q: (少女アイドルグループの写真を示して) このようなことはフィンランドでありうるか。

A: こういうグループはフィンランドにはない。人気が出るとも思わない。

Q: ポルノグラフィーの描き方が虚構だと気づけばいいが、日本にはあまりにもポルノグラフィーがあふれているので、未だに、アダルトビデオと同じようなセックスをしたがる若者が沢山いる。それはすごく暴力的だったり、ジェンダーバイアスに満ち

ていたりする。

A：日本のポルノでは、セックスの時に出る声についても描き方が違っている。ポルノが影響を与えているといえる。

Q：フィンランドの児童保護法（Child Protection Act）は、このようなアイドルの扱い方を防止するか。

A：そうは思わない。というのは、フィンランドで（このような扱い方をされるの）はみな大人だから。このようなアイドルグループは、フィンランドではメディアに批判されるだろうと思うし、売れないだろうと思う。

ただし、子どもはセックスをしてはいけないというのと同じことにもなり、セックスにネガティブになり、セックスに関するものはすべて消去してしまえということにもなりうるので、線引きをするのは難しい。常にバランスが問題である。同性であろうとなかろうと、フィンランドと日本以外の国では、大人の裸の体を見るということはない。フィンランドでは、家族でサウナに行くので、若い人が大人の裸を見る機会がある。日本でも公衆浴場に行く。それはいいことだと思う。フィンランドでは、映画やTVで性器を含め裸の体を見せることが可能である。TVのコマーシャルで誰かがサウナに行って裸という映像を見せることは可能である。これはセクシャルなものとはみなされない。裸でいるということと、セックスとかポルノグラフィーとかいうこととは本当は別のこと。

(8) フィンランドの性教育に関する参考資料の入手方法

Q：フィンランドの性教育の教材やカリキュラムを説明した資料を入手したい。

A：日本語だと、橋本紀子先生がフィンランドの性教育について本を書いている。ヨーロッパ諸国の比較もなさっている（女子栄養大学名誉教授）。

図書館や大学図書館に行くと教科書を見ることができし、書店で購入もできる。もっともおもしろいと思うのは、8年生の保健の教科書である。

以上

（花田 さおり）